構想研究（Initiative Research）2002, Volume 1, 16- 30

構想概念の射程

想像のスベクトラムと２つの構想モード

半田智久（宮城大学大学院 事業構想学研究科）

Portée of initiative : Spectrum of imagination and two modes of initiative

Motohisa HANDA（Miyagi University Graduate School: Department of Business and Entrepreneurship）

Abstract: In this paper, the importance of getting portée-- shooting range -- of initiative in various imagination is confirmed. The initiative has meaning and value which deduce the image described by the imagination to the shape, and it is possible to largely find at two modes. One is representational initiative that is amplified as a mental imagery in the brain, and actualized prosthetically as a shape by technology. It is a mode of the direct initiative which connects formation of the image and development of shape and action, with circulation like in positively avoiding the amplification of the representation The mode of this plan gave the fantasy of the advance in the society. We keep following it, and there is here at present. The direct initiative has two directivity of maginaire and bricolage. Though the representational initiative was dominant in the twentieth century, in the new century, the direct initiative based on the reflection will become a task.

Key words: initiative（構想）, concept（概念）, imagination（想像）、representational initiative（表象構想）, direct initiative（直接構想）

本稿では多様な想像力における構想の射程、すなわち portée をとらえることの重要性を確認する。構想は想像によって描かれるイメージをかたちへと導く意味と価値をもち、大きく２つのモードでとらえることができる。ひとつはイメージが表象として頭のなかで増幅し、そこにテクノロジーが参画して増幅した表象がかたちとして現実化する表象構想である。この構想のモードは人類に科学技術的な補綴による進歩という幻想を与えた。私たちはそれを追い続け、今ここにいる。もうひとつは表象の増幅を積極的に避けて、実際行為とかたちへの展開を循環的につなげる直接構想のモードである。直接構想にはたとえばイマジネールとブリコラージュという２つの方向性がある。20 世紀は表象構想が支配的であったが、新しい世紀ではその反省を踏まえた直接構想が課題となるだろう。

はじめに

フランス・ルネサンス期のモラリスト M.E.de Montaigne は『随想録（1588)』の章 Raymond Sebon の弁護で「自惚れは我々の持って生まれた病である」とし、その思いあがりは想像力がもたらすもの「空なる想像によって、彼はその身を神に比べ、その身に神の性質をさずけ」ると嘆いた。この書に多くの示唆を得た B.Pascal も 100 年後、同様につづる。「想像力。それは人間におけるあの欺瞞的部分、誤りと偽りとのあの女主人。いつもわるがしこいときまっていないだけに、それだけいっそうわるがしこいもの（Pascal,1670)」

このすぐに思いあがるわるがしこい想像力を、ここでは imagination ということばのもとにおさえよう。この概念が image という概念から派生していることは、その字面からすでに明白である。

image = 像、それを想うこと、すなわち想像、その能力が想像力である。このあたりまえに思えることが、実ははなはだ厄介である。というのは普通わたしたちはその像が当然、こころのなかにつくられる心像であり、こころ = 脳という図式からすれば、それが外の情景そのままの像であれ、抽象した命題であれ、頭のなかに描かれるものとみなしてきたからである。

たしかにその働きに頭の関与を無視することはできない。しかし、想像という働きのすべてを脳の仕業と断定する根拠をわたしたちはまだ手にしていない。したがって、想像の働きは脳を超えておさえる必要があるのではないか。この疑念がイメージのありかをめぐっていまだに漂いつづけている。うぬぼれの強い想像力であるだけに、これを頭のなかに閉じ込めておくと、まさに井のなかの蛙のように思いあがるにちがいない。だが、その性質に鋭く自省的になり、頭を離れた働きとの動的な連接にイメージを展開できるなら、井戸の外の世界でも受けいれ可能なかたちが描けるかもしれない。

本稿の目的は想像という想念がもたらす幅の広さを確認し、そこに交わる「構想」の関係と様態を明確にすることにある。構想はしばしば imagination と同義に解釈される。しかし、構想は想像、つまり imagination がもたらすイメージを現実のかたちに結構してゆく活動を導くものであるから、そこにはひとりその想念の活動だけでなく、加えて内発的な欲動や意志の関わりがある。感性由来の悟性的作用に加えて理性の参与による実践的なポイエシスをも含む精神活動がともなっていることが多い。しかも、そうした構想的な制作にしばしばみられる創発性に着目すれば、個体の精神作用を超えてオートポイエシスを導くような環境世界のアフォーダンスの関わりも無視できない。してみると、構想とは認識に加えて行為を介した制作へとつなかる人間諸能力のオーケストレーションというにふさわしく、たとえていえば、暴れ馬の性質を孕む自由奔放な想像力をあやつる手綱に握られたその手の挙動に構想が展開されるといえよう。その指揮棒や手綱を握る手の先の動きに表徴される構想にもっとも適する別のことばを探せば、それは initiative ということになるだろう。このことばの適用に関しては機会をあらためて論じる。

また、このように実際行為を内包した構想という概念は、それゆえにその力、すなわち構想力が問題とされる場合は、単に構想する力とかその能力という意味ではとらえきれないことになる。つまり、構想そのものは手綱の握り方や制御の仕方を巧みに語ることのなかにあるとしても、構想力はそれによって実際に馬を操れることが問題になるからである。しかし、おそらくその力の本領は操ることと操られることの境界が融解したときに発揮されるのだろう。操る段階を超えて馬と一体になったときの構想力には想像力が孕む性質がそのままあらわれる。その事の大きさゆえに想像と構想、さらには構想力に向けられる眼差しの意義にスポットが灯される。

想像によるイメージの結像が理性直動的な統御のもとでかたちをなしてゆくとき、構想力は想像力のとんでもない思いあがりを現実化させることに結果しがちである。とりわけ 20 世紀は科学的理性が論理実証、普遍妥当性を背景にして合理精神を語り、人類に種々の発明、発見と新しい力をもたらした。その結果、人類の意識はその力のもとでの栽培育種化に向かい、裸の身体との乖離を著しくさせてきた。大方のそれは想像力の思いあがりを現実化させた構想力の結果として省察される。したがって、その歴史を踏まえ、想像における構想の射程を捉え、

あらためてその地平、すなわち限界と可能性を描きだすことの重要性は大きいといえるだろう。

想像のスペクトラム

まず、想像、つまり像を想うことのさまざまな様態をその「想」という文字を含んだ概念において整理しよう。想像という心的活動をひとつの軸にとらえるなら、種々の「想」概念はそのスペクトラムとしてを位置づけることができる。むろんこれはスペクトラムであるから、個々に切りだされる「想」が独立して一定のポジションをとっているということではない。つまり、どこまでが空想でどこからが夢想なのか、夢想は幻想ではないかといった問いは、どこまでが赤でどこからが黄色なのか、朱は赤ではないかといった問いと同じことであり、スペクトラムの意味することではない。ただここは切りだし可能な複数の代表値としての「想」で想像の帯域を確認することが目的である。

はじめに意想、考え、想いとしての「着想」を基点にする。着想は偶然性に満ちている。そのため「ふと思いつく」さまをいうことが多い。思案の末にたどりつく着想もあるが、それでもその瞬間は思考の一瞬のとぎれののちに訪れる啓示の性質が含まれている。おおくそれは意識の流れの転換としてあり、着想はおそらくその先に別の想像が進みだす始まりとして位置づけられる。

これはいわゆる発見のパターンと重なるが、そもそも発見というプロセスが着想に始まり、その確認や証明へとつながる全体を指すのだからこれは当然といえるだろう。もっともすぐれた発見は着想の段階で事実上、完了しているほどの洞察をともなっているようである。このことは発疹チフスの媒介者がシラミであることを発見した C.J.H.Nicolle のつぎの回想によくあらわれている。「(チフスを媒介しているものはシラミではないかという想いは) ほとんどまったく突飛なものと思われるほどの鋭い直観によってもたらされはしたが、私の理性は実験による証明が必要だと告げた……私は、他の多くの発見者もしたに違いないような経験をした。すなわち、証明などしても意味がないという感じがし、頭がまったくうわの空になって (Taton,1955)」しまった。しかし、証明のための研究はつづけられ、その着想が的確であったことを確認して発見が成立に至ったのである。

着想から時間軸上、先へと進む想念をみる前に、反対の方向をみておこう。これは Kant が批判哲学三部作以来、考察をつづけた構想力について、74 歳に至り記した彼の人生最後の書である『人間学 (1798)』のなかでふたつに分けてまとめたそれのうち、再生的構想力と呼んだものに重なってくる。すなわち「対象を派生的に描出する……能力であって、この描出はさきに持ったことのある経験的直観を心の中にとり戻すもの」である。ちなみに彼の構想力 (Einbildungskragt) に対する見方はその哲学をつうじて幾度か変化するが、この老境に至ってのそれはわざわざラテン語 facultas imaginandi を付記したことにもあらわれているように、日本語の概念では構想力というより (ふつう翻訳ではそのことばで貫かれているが) ほとんど想像力に重なるものに変容したといってよいだろう。そのことを踏まえていえば、ここでみているのは再生的想像力である。

つぎに、それまで進行してきたことがらの経験をとおして現在に終わる想念に「感想」がある。感想は経験した事実の列挙ではなく、再生的想像を含む思念であるから、これも想像のスペクトラムに位置づけられる。それが折々のこととして綴られるならば「随想」となる。

過去をいまに語る随想や感想に対して、いまを起点に能動的に過去へと遡行してゆけば、その再生的想像は「喚想」であり「回想」「追想」となる。記憶は過去の忠実な写し絵であるからこそ記憶としてのアイデンティティをもつという見方は現代の心理学では通用しない。目撃者証言の研究を契機に生態学的妥当性に配慮した研究で確認されてきたことは、こと人間らしい記憶を相手にするかぎり、それは本質的に再構成的であり、たぶんに作話的でさえあるという事実である（Kotre,1995）。つまり、喚想も回想も積極的な想像作用の次元に入り込んでおり、追想ではそこに甘味な味付けも施されている。

時間軸を反転して着想を得た先の方向をみてみる。この方向は先の Kant（1798）によれば、「対象を根源的に描出する……能力であって、それゆえこの描出は経験に先行する……（ただしこれは）それだからといって必ずしも創造的ではない。すなわち、あらかじめ私たちの感官能力に与えられることが決してなかったような感官の表象を作りだすことはできない」とした生産的構想力、あるいは生産的想像力といいうる方向である。

着想はグッドアイデアをあらわすこともあれば、反対に間にあわせでいいかげんな考えをあらわすこともある。多くは前者を指しているが、結果的には後者に終わることも少なくない。だが、後者の場合、その負の評価は着想に含まれる偶然性とは対極にある必然的な論理様式にもとづき下されるものになりがちである。つまり、当然の枠組みを超え出た着想が当然性の外にあることをもって下される傾向がある。グッドアイデアもまた往々にして枠を超出しているからこそ評価されるのであって、この意味では着想は正負どちらにしても多少なりとも「奇想」的特徴をもって、時間軸の先方に対し可塑的な想像性を宿しているといえるだろう。もっとも奇想といえば、それはバロック文学に特徴的なアレゴリーでもあり、そこには異なることがらを暗示的に連結させて比喩として本義を語るレトリックの技法が展開されている。これはのちに述べるように G.Vico が構想力として捉えたインゲニウム（ingenium）と重なる。

そうした奇想的特徴を含んだ着想を前向きに膨らましてゆけば「仮想」へと展開する。枠組みを超え出ているがゆえに、あくまで枠の内部にとどまりながら、想念を進めることにこだわれば畢竟、それはどこまでも仮のものとして位置づけるしかなくなる。超え出た着想を踏み台にして動きだすのではなく、その場で仮にリアリティを構成しながら想像を膨らませようというわけである。その枠組みが「現実」であるならば、構成される場はもうひとつの現実、仮想現実の世界ということになる。その時空は「どこか他のどこでもないところ」として措定され。無と内破を内包するがゆえの超越的な活気に溢れることになる（Stone,1995）。

一方、視座を別の世界に置かず、現実の延長線上において思い描くなら「予想」となる。D.Hume が経験を超える想像力の問題として焦点をあてたところである。すなわち、経験をとおしては得られるはずのない「必ず」とか「いつも」「きっと」と表現しうる認識をもたらしがちな力である。予想のもとにそのイメージを語る予言者のことばは不明確であると同時に絶対的である。「必ずやそうなるであろう」とのことばに因果の根拠は不問である。むろんそ

れが預言となれば神の領域にまたがる。

仮現世界で得られる自由の翼をひろげ、その大地から羽ばたいてゆくならば、想念は「空想」となり、その空中は空想世界となる。仮想が現実の地面に足をつけながら、その空や外部を仰ぎ描くのに対して、空想はいまや現実の枠を超えて高く舞いあがり、その空中で像を描く。この眼下にみえる地表をまさに土の性質そのもの、つまり肉体とそれがもつ現実の諸々への執着ととらえるなら、空想から先への飛翔はハデスへとむかう魂の航行にもみえる。

その世界がC.G.Jungのいうような人類共通のアーキタイプにつながっていたり、S.Freudがこだわったような無意識への扉を開けて踏み入れた快楽原則やイドが支配する世界であるならば、すでにそこは「夢想」が描く夢の世界が広がっている。ここでも想念は神託と出会うかもしれない。めくるめく空想世界や仮想現実を描く多様な小説には個々のストーリーを超えた少数のプロットがあるといわれている。たとえば、有史以来あまたの恋愛小説が描かれつづけているが、その典型的なプロットは「出会い、別れ、再会」であるといわれ（Adler & Doren,1972）、人はこの骨子にもっともこころを揺さぶられるようである。そのロマンスに求められているものは、元型的な夢想に符合しているのかもしれない。たとえば、そこには母なる始原とのめぐり会いとそこからの旅立ち、そして回帰という集合的無意識、あるいは生のときめきと死、中有の旅と再生という神話的スクリプトがみえる。とりわけわたしたちはそのストーリーにおける中有の後悔、迷い、放浪のなかで無に帰する諦めに沈んだのちに劇的な再生をみて感動する。

夢想にはそうした超越的存在との接点の契機が含まれているが、そのより能動的、意識的営みは、たとえば座禅や曼陀羅といった手段をとおして「瞑想」という行為により試みられる。もっとも三木清（1954）のように瞑想を本人の意思とは関わりなく突然訪れるものと随想している人もいる。彼の場合、それはたとえば対談の途中でも、あるいは喧騒のなかでも突然頭上から降りてくるようなもので天与のものを思わせるという。いわば啓示だが、同様に「あたかも天からおっこちてきたかのような現われ方をします」と語るのはJung（1935）で、彼の場合はこれを直観の説明として語っている。

意識的な営みによってなされる修業的な瞑想の場合は、やがて想念を無にする境地、「無想」へと至る営みへと通じるようである。それは阿耨多羅三藐三菩提、悟りへの道である。仏教においてそれは煩悩の束縛から解放され寂滅の境地にいたることになるが、ここでもはや想念は空想から先、現実の大地からはるか遠いところに来ている。瞑想を錬金術の立場から探ったJung（1944）によれば、それは眼にみえない何ものかとのこころの内での対話であり、いわばその無意識の声との創造的な対話をとおして「物が無意識的潜在状態から顕在状態へと移行する」という解釈をほどこしている。

ところで、夢にはなにかこころの深い場所とのつながりがありそうで、そのくせこの世の彼岸とはいいきれぬ現実性も帯びている。それに対して、空想の自由をいっそう現実から引き離す方向に差しむけて、架空の世界を思い描こうとするとき、それは「幻想」、ファンタジーとなっていく。夢幻と一括するように夢想と幻想は重なり連なるが、あえて両者に境をつけるとすれば、夢作用が意識的、意図的制御の及ばない現実性を帯びているのに対して、幻想には現実という枠のすべて、とりわけ形式からの意識的脱却が図られている。音楽の世界で幻想曲

といえば、作者のかぎりなく自由な想像をもとに作られた曲のジャンルとしてあり、たとえばBerlioz 作曲の『幻想交響曲（Symphonie fantastique）』はその典型である。幻想における形式からの脱却、自由奔放さを前面にすえた想像は「狂想」や「綺想」とも語られ、それが楽想として展開すれば、Paganini の『24 の綺想曲（24 Caprices）』のようなカプリッチオとなって、その機知や技巧が評価される。そこにみられる狂気は Platon が『パイドロス』でいうムッサの神々から授けられた狂想にちがいない。彼はいう「この狂気は、柔らかく汚れなき魂をとらえては、これをよびさまし熱狂せしめ、抒情のうたをはじめ、そのほかの詩の中にその激情を詠わしめる。そしてそれによって、数えきれぬ古人のいさおを言葉でかざり、後の世の人々の心の糧たらしめるのである」

おもしろいことに、楽曲の創作的想像には一般に「楽想」とか「曲想」ということばが使われるが、絵画のそれについては画想なり絵想、あるいは描想、図想といったことばが使われることはほとんどない。その絵画についていえば、Caillois（1965）は幻想（fantastique）絵画に関する考察でその条件を厳しく規定している。たとえば、幻想作品たりうる資格として「まず、経験なり理性なりにとって、到底容認しがたい言語道断の事象として映るのでなければならない」とする。しかもそれを為すにあたり「計算ずくのたくらみのようなものが働いて、幻想をもって新たな秩序の基本原理に仕立てようとするならば、当の幻想そのものが破壊されてしまう」と警告する。そして「本質的幻想にはおそらく、ある種根源的な曖昧さがつきまとう」とし、「なにかしら無意識的なところ、従容としたところがなければならない」としている *。

この Caillois を下敷きに幻想文学について考察した Todorov（1970）はいう「幻想とは、語られた出来事について読者が抱く曖昧な知覚のこと」。作中人物の世界が人間の世界でありながら、語られた出来事が自然に解釈できるか、超自然的なものとして解釈しなければならないか、読者にもたらされるためらいが幻想の第一の条件であり、とりわけ幻想文学においてはそのテクストが詩的でも寓意的でもない読み方がなされうることがもうひとつの条件であるとしている。

幻想が楽曲や絵画、文学へと作品化されるのとは反対に、想像世界が現実の他人の声や行為、姿を含んだかたちで知覚や認識へと浸潤して確信的に一体化するならば、それは「妄想」という領域に入り込む。幻想や瞑想が意識に対するなんらかの変性を伴うという点では妄想もまた等しくそのとおりといえようが、この想像世界が幻想などの想像作用と連続線上にあるものなのか否かは、にわかには語れない。

想像における「構想」の作用軸

空想、夢想、幻想の世界でその想像を作品へと形象する方向にむけ、それを文字と韻に託せば「詩想」、旋律に託せば「曲想」や「楽想」、思索とことばに託すなら「思想」となる。これらにみる想像がかたちになった像、それは具象であるかもしれないし、標題音楽に対する絶対音楽、あるいは命題的な抽象としてあるかもしれないが、そうした像をことばや楽曲や図やかたちへと結構してゆくこころの過程が構想の行為的側面ということになるだろう。単簡にいえば、構想することとは想像のスペクトラムにおいてそれぞれの想念に交わるかたちでそこに表

出しているイメージをなんらかの現実的なかたちに統合、表出、展開してゆくことである。ただし、こうした構想の行為面は構想という精神活動がある程度の客観性をもって外に表出したひとつの現象を映し出しているにすぎない。構想や構想力そのものはその行為の背後にある精神の基盤にその由来をたずねなければならないだろう。

構想の力がわたしたちの心の働きとして不可欠のものであり、これなしで認識は成立しないとしたKantは構想力に対する考察を深め、さまざまな観点を提起した。すでに述べたように思索の進展や切り口によって、その見方は変化するが、たとえば、ひとつの到達点として『純粋理性批判』の第二版（1781）、概念の分析論では、構想する力が種々の表象を互いに加えあわせて、その感性由来の多様をひとつの認識に綜合してゆく無意識的な作用であるという解釈をくだしている。この見方では、想像のスペクトラムに対する構想の交わりの作用軸は、一方に認識由来の悟性、他方に感覚由来の感性に基点をおいている。そのうえで大きな特徴はひとつに構想力が無意識的に進行する精神のはたらきであるとしていること、もうひとつはこの力が結果として表象をつくりだすとしている点である。前者についてはこの不随意的な精神プロセスがそれゆえにわたしたちやその社会にとってただならぬ問題をもたらすおそれを語っているのであり、この点はつぎの項でくわしくみる。

想像のスペクトラムに働きかける構想の作用軸を追うと、そこには表象構想と呼びまとめることのできる構想の様態がみえてくる。以下ではまず、このモードの構想について検討し、とりわけこの構想のもつ限界や問題点をあぶり出す。つぎにこれらを乗りこえるもうひとつの構想のモードとして、感性由来の想像的作用としてありながら、心的表象に投映、媒介させることなく直接知覚した現実そのものに想像を律動させてゆく直接構想という様態について光を当てる。

表象構想（representational initiative）

まず、近代の思考の特徴ともいいうる表象を基盤に展開される構想についてみてみよう。近代の知の典型、科学の基本的手だては観察である。この方法では主観的、感性的観点は捨象され、客分として観ることに徹しようとする。その結果、鏡やレンズを通して映しだされた像を写実的に受け取り、共約可能な記述をつくすことになる。可能性としてありうる世界は向こうにおかれ、視界はその此岸、現実の世界にとどまる。それでいて観察者自身はその現実世界に直接触れて感じることからは遠ざかり、ガラス越しにどこか別の場所から眺めていたりする。分子生物学者F.Jacob（1982）はいう。「科学者は理解しようと努めている世界から、身を引こうとする。言い換えれば、一歩下がって、研究対象である世界に属さない傍観者の立場をとる」。しかも、科学者はカクテルミックスされた他者として対象にかかわろうとする。その他者は誰でもない誰かであるゆえに、人であるはずの人でなし。そのため「いわゆる「客観的世界」は、こころと魂、喜びと悲しみ。欲望と希望を欠いたものとなってしまった（Jacob,1982）」。

科学における構想はかつてDescartesが求めた諸学の到達点、普遍学を仰ぎながら、真実の普遍妥当性にむけて注がれる。だが、それは常に自身が立つ世界とはべつの場所、いつ誰にとっても妥当という誰もいない無何有の郷に求められているのであり、まさにこれは夢想的構

想世界である。

だが、ここで理性が駆動する想像は現実に生きるために、もう一方にきわめて実務的な相方を引き連れた。科学技術（science-based technology）である。基本的に理想郷をめざす科学の道はそれゆえに果てしない。そのため目的地への道程で見いだされる事実は常に仮説の暫定的な検証にとどまる。それは理想解ではないので、その中途半端な成果はとりあえず現実世界に引き戻して有用性の御旗のもと、いわゆる応用として供することでその存在理由を明確にしようとする。そこに科学が封じたはずの喜びや悲しみ、欲望や希望が堰を切ってあふれ出す。さらにはここに科学の専門知を基盤として産業社会の行政的主導権を手にすることで、権力の体系と機構を築き動かすテクノクラシーも展開する。ここに顕現する先導性は先端がつきものの科学がおのずと宿す構想（initiative）力の典型ともいえるだろう。

科学技術は科学のもつ理想郷を一気に現実世界での理想へと書き換えて、可能世界での実現へと走りだす。そこには人類とその社会の進歩のためという明るいユートピア的大義が掲げられる。そのユートピアイメージにもとづき現実はいまだ発展途上で不備なもの、改良されるべき対象として観察される。そこにはまた科学の禁欲をリビドーとしてため込んだ反動のエネルギーが吹き出している。モダンテクノロジーは自然の姿を縦横に整序し、そこにコンクリートを流し込み、垂直、水平に鉄とガラスを積み上げた。さらにポストモダンのテクノロジーは線と面を曲げ、そこにプラスチックと、とりどりのおもちゃを組込んで境界を壊し、かき混ぜる。どちらにしても観察の眼差しは科学のイメージ眼鏡の背後にある。まさに望遠鏡や顕微鏡を覗くその姿勢と同じ、いわば表象の鏡に映った世界に進歩、発展、開発の技術をマジックハンドやパワーシャベルで展開するのである。

補綴的間接構想（prosthetic indirect initiative）

いまからおよそ 400 年前、Galilei は客観的に測定できる対象の第一性質だけを相手にし、色や味、香りなど主観的な感覚を引き起こす第二性質は相手にしないという方途を表明し、魂の分離と機械論の萌芽を提起した。同じ時期、Descartes も心身二元論の立場をとり、身体から魂を引き離し、メカニカルな身体像を鮮明にした。その 100 年後、de La Mettrie が人間機械論を声高に提唱し、魂の追放をおこなう。彼がその勇気を得たのには、人類が手にした革命的機関、みずからの機械的身体の微力を著しく増大させる動力源、蒸気機関を見聞したためかもしれない（半田 ,2001）。この新機関はまた、人類の構想力にも革新的な作用をもたらした。すなわち、これは表象の螺旋的膨張を現実化させる機械テクノロジーによる補綴的な表象構想とそれがもつ力への覚醒をもたらしたのである。

科学技術は現実社会に対して常に自身の有用性を語ってきた。しかし実際のところ、そこに息づく生活世界にとってのそれは暴力的な侵襲になりがちである。それはこの技術が科学の無垢な理想 — 典型的には真理、あるいはその美の追究 — のもとに展開される表象を、そのまま横滑りさせて現実世界における有効性、夢の実現として中途半端なままで拡大投映するためである。

ここで働く表象は外の現実の代理として頭のなかに描かれていると想定されている。それは一部、自在に抽象的な命題へと変容し、二次的な代理表象へと展開する。そのプロセスにおい

て「自然なまま」の多くは論理命題化にとって「不自然」なものとして、たとえば唯物、あるいは客観のフィルターをとおして削ぎ落とされ、テクノロジカルな論理に沿った命題に整序される。これはメカニカルな観点でなされる機能的な代理表象化の操作であり、人はこれを理に適ったこと、すなわち合理として解釈してきた。ここにはとりわけ生活世界の視座からすれば、かなりの捨象を伴う無理が押しとおされていることが多い。それでも、仮説や実験上の統制、予備的研究といったことわりがきが添えられて、それを無理なき合理と読み替える防衛機制としてのメタ合理化が施される。

また、代理表象化においてはその表象像が単なる現実の写像として再現されるわけではなく、表象のなかで種々の欲望をひきつけ、肥大化、あるいはデーモン化したのちに現実のかたちへと再投射されがちである。その精神の営みはひとつにはたとえば芸術、典型的には幻想芸術の世界に昇華されよう。しかし、問題はそこに描かれたファウスト的野望がテクノロジーを介し、機械や情報技術の手だてによってわたしたちの実生活の世界で「あの夢の実現」として投じられることにある。このとき概念操作は簡単にいえば、つぎのようになされる。理性はその想念、つまり理想ないし理念を合理的に現実化する。夢のもつ理想的観念は技術によって唯物的に結晶化される。目標や夢に描かれた表象の、かたちへの現実化は構想のリアリズムとして解釈される。

夢を現実にかえる魔術は自動化、システム化、巨大化、極小化へと縦横に展開されるが、いずれもがわたしたちの身体能力をさまざまな方向で拡張させる機械的な補綴としてなされてきた。つまり、そこに構想されたものは頭のなかで代理表象されたわたしたちの力の増幅、その力も動力、推力、破壊力、統率力といったかぎりなく強まる覇権的な力への欲望に根ざしたものであった。

この近代に常識化した科学とその応用技術との蜜月を踏まえて「構想力の論理は科学の論理に媒介されることによって現実的な論理に発展しうる(三木 ,1939)」と明言した三木清(1948)はいう。「欲望や意志が形となるのでなければ、それは技術の中へ入ることができぬ。かやうに形となる欲望や意志がまさに構想力である……人間は道具を支配しこれによって身体的な欲望の主人となることができる」。この三木が語るような構想の様態は代理表象とテクノロジーによる媒介を前提としている。それゆえにこれを「間接構想」とよぶことができる。

間接構想では基本的に表象があたまのなかにつくられ、その表象に対する技術的操作を経て、その結果をかたちにして外へあらわしだすというプロセスをとる。したがって、これはメンタルモデルを基盤とした 20 世紀終盤の認知科学の典型的なパラダイムにも合致し、一般的な構想観としても納得、受容されやすいといえるだろう。

実際こんにち、この構想観はサイバネティックスにはじまり、コンピュータ通信、サイバーオーガニズム、身体無化へと展開する仮想水準での想像の螺旋的膨張を現実化させる情報テクノロジーによる補綴的構想へと恐竜化している。ここで恐竜化という表現が意味するところは、またたく間に巨大化した存在が、その膨満生長を可能にした表象構想の虚構性のうえに成り立っているがゆえに、やがてきわめて微妙な環境変化やわずかな気づきだけで、一気にその存在がほとんど無に帰するようなカタストロフィックな性質を孕んでいるということである。このことはこんにち巨大化し、活性化している市場の一部が、たとえまるごと消失してもその

経済的損失は別として、実際の生活そのものにはさしたる影響がでないであろうほどの余剰な存在であることを確認するだけですぐに理解できる。

すでにわたしたちは健常者にあっても身体にさまざまな機械的補綴を施し、スパゲッティ状態でサイボーグ化と恐竜化への道を歩んでいる。そのためわたしたちは次第にこうした補綴された心身をもてあまし気味になっていると同時に、個々の身の丈の領分を超えでていることの制御不能性に慢性的不安を感じはじめているはずである。

想像のスペクトラムにおいてみるとき、補綴的な表象構想は理性が駆動する構想として、まさに狂想といいうるほどグロテスクに膨満した想像を基盤にしている。それでも、みずからはおよそそれを狂想と解することはないだろう。理性は現実に立脚していることを自慢の種としがちであるから、そのときどきにおいて合理性や効率を語りつつ、あくまでも現実にたった仮想や予想の範囲での想像において構想しており、よもや空想より先には進んではいないと信じている。その想像は理性の特徴として栽培、家畜化された思考の囲いのなかにあるから、たとえそれが空想を超えて狂想や妄想の域にあっても、その虚妄の想念をそれとして解釈することは困難になっているのである。

夢幻の果て、その破綻

代理表象のなかで間接的に生じる運動についてみてみよう。この運動はそれこそ "Powers of ten（Morrison et al.,1982）" のように、極小の世界から銀河のサイズにまで瞬時に拡大する運動や、植物が動物のように動きまわる運動を目の当たりにさせる。むろんこの目はこころの目であるが、この「目の当たり」が重要な点である。つまり、代理表象の世界における運動はほとんどの場合、映像的な運動として想定される。

この運動は力学的な運動ではないが、感化作用として現実の運動を触発することはある。だが、現実を映しだしているはずのマラソンランナーの「楽しい」といわれるその走りも、現実に真似してみれば、大方にとって数百メートルで息の切れる苦痛の運動が待っているだけである。代理表象が描く世界の再現には無理や不合理がつきものとなる。結果的に早々に現実をあきらめ代理表象の世界をむしろ生活世界の（電子）窓越しに眺め、そこでの昇華を楽しむようになる。現実にはほとんど動かずしてそこでは理想と現実の相違を実体験をこめて語りつつデカダンスを決め込む。それを現実をよく理解した自分として了解しようともする。その一方で代理表象のなかでキャッチしためくるめく過剰なイメージの、より過激な運動にこころを寄り添わせ、多くは興奮を誘うスペクタクルの観客として異様なまでに熱狂した一時的参加を果たす。

生活世界の中軸を生身の現実世界から代理表象世界の方向へシフトさせていると、いつの間にか生身の現実世界そのものにも代理表象の世界が持ち込まれるようになる。映像の世界で描かれたり、テーマパークのおとぎ屋敷で展開されている劇場的街並みが、そのまま日常の街並みに広げられ、人々はそこに足をはこんでこころのコスプレを楽しむ。転移と移植、写しのなかでシナリオ（教科書）化された楽しみ方を演じる世界がそこにある。パンとサーカスが与えられた民衆は生の実感の喪失と向き合いながら、なおその実感を求めて、表象的に描かれた楽しみ方を演じようとする。それはキラキラと輝くものから、少し考えてみればおぞましきもの

まであるが、いずれにしても代理表象の鏡映描写であり、フランケンシュタインがもつグロテスクの表徴を宿している。

この極にある構想は多くの社会の人々を馬鹿笑いと一過的歓喜、嫉妬と癒しの渦に巻き込みながらおそらく喜劇とはいいえぬ方向へと導いているようである。それではわたしたちの構想力は救いようのない精神作用なのだろうか。もう一方の構想のモードに光を当ててみよう。

直接構想（direct initiative）

こころに描かれる表象とそこに権勢への欲望を注入し、理性駆動型の合理化を施しながら増幅させてゆく間接構想に対して、もうひとつの構想のモードはいわば表象に表象を塗り重ねる増幅を媒介しない直接的な構想である。むろんこのモードにおいても知覚にもとづく表象は重要な働きを担っている。わたしたちの覚知は表象から離れることはできない。だが間接構想と異なり、ここでの表象はつねに実際に知覚される現実に直接結びついていて離れず、表象への操作はすぐにそのまま現実のかたちとして表現される。さらに、そのあらわされたかたちを知覚することはそのまま表象となる。つまり、表象とそれにもとづきかたちづくられる対象は一体であり、その意味では対象が認識されつづけるかぎりにおいては事実上、代理表象の媒介なしに直接的に構想が展開されることになる。

直接構想で描かれる見取り図はスケールにもスピードにも人を驚かせるものはない。間接構想のように表象が仮想世界で夢や欲をひきつけて増幅し、それをかたちにするテクノロジーを動員して顕現するということがないからである。直接構想での大きさや動きはわたしたちの身の丈の範囲にあり、技術は手仕事の域に留まる。

かつて東洋美学者の金原省吾は、たとえば写生において、観る働きと描く働きのふたつの過程を重視し、そのプロセスのなかでとりわけ観る働きにおいて構想がおこなわれるという見方を提起していた。そのうえで、「観る働は、描く働によってなされ、描く働は観る働によってなされる。観る働と描く働とは連続した一連の働である（金原、1933）」とし、ふたつの過程が不即不離のものとしてあることを強調した。つまり、観る働きは解釈と構成の連鎖として深く発達してゆく作用であり、それは対象に対する理解と同時に、さらなる疑問や関心を生みだし、観る働きを持続させてゆく。観る働きの再帰的な反復代入はいわば想像の生長であると同時に描くことの具体的な展開としてとらえることができ、ここに循環する過程がまさに構想のプロセスにあたる。

金原はいう。「この構想のなかにおいて、あらわに見ゆるものが、見えざるものによって支持せられてくる。この支持がすなわち構想である（同）」。アートにおける観る働きではかたちは自然を基礎にしていればよいのであって、対象を直写するのではない。彼は 14 世紀中国の文人画家、倪雲林が「胸中の逸気を写す」と語った描画姿勢のことを例にし、形似を捨ててゆくことをもってその画をますます画たらしめることを強調する。そこには自然のかたちが、作者の態度と要求により発展したかたちとして創作される。そこにその作者の真実をみることになる。

「見る者が自分の見ているものをおのれのうちに取りこむなどということは、あるはずがない。

見る者はただその眼ざしによって物に近づき、世界に身を開く」と語る Merleau-Ponty（1961）も、画家が身体を世界に貸すことで世界を描いているとみていた。それゆえその身体は視覚と運動の縒（よ）り糸のようなものだとみる。いわく「私の運動は視覚の自然な継続であり、その成熟である」。この観ることとかたちをつくりだすことの連続的な循環、いいかえれば目と手がつながりあって離れない状態で想像を働かせつづける行為が直接構想の基本である。この点を確認したうえで、この構想の射程が及ぶふたつの方向を予備的に示しておく。

ひとつはたとえば G.Bachelard が語るようなイマジネール（maginaire）：想像的なものへの展開である。彼がここでいうイマジネールとは一般にいうイメージとは異なり、むしろその彼岸に位置づけられるものである。彼はいう。「想像力は知覚によって提供された（基本的）イメージを歪形する能力である。それはわけても基本的イメージからわれわれを解放し、イメージを変える能力なのだ（Bachelard,1943）」。よってこの視座において想像力 imagination に対応する語は image ではなく、imaginaire（想像的なもの）なのである。それは動的な夢想でありながら、つねに生活世界における生との関係を保ち、新しさへの本質的な渇望のもとで「感情に希望を与え、人間たろうとするわれわれに決意と特殊な逞しさを与え、われわれの肉体的生命に緊張を与える（同）」。

いかにも Bachelard らしくその表現はあくまで詩的であるが、この見方を補足するものとして、Bergson のいうダイナミックスキーマ（dynamic schema）を援用することができよう。個々のイメージがかたちをなすものとして前提されるのに対して、ダイナミックスキーマの場合はそうした「イメージを再生するためになすべきことの指示を含んでいる（Bergson,1919）」。それはイメージのかたちの変化や関係、動きをあらわし、多様なイメージへと展開しうる動態的な図式であり、Kant にたちかえれば構想力の所産とも重なる。Kant（1781）が「人間の心の奥深い処に潜む隠微な技術」と語ったそれを生活世界で生きられる技術として引き延ばしてとらえれば、動的なイマジネールにつながるだろう。

ここでいう直接構想の直接性は、イメージのかたちとしての表現行為を、表象において想像的（空想的 - 狂想的）に増幅させてゆく間接プロセスを積極的に回避すること、イメージを直截的に外部のかたちへと現実化することによって、再びそれを観る活動につなげ、その現実のかたちとの連接においてイメージを継時的に変化させながらその生命性を保とうとすることにあらわれる。

わたしたちにとって外部として認識されるもの、その認識に相当する場が果たして内なのか外なのかという問いはあるものの、その問題をとりあえず留保すれば、内と外との絶えざる相互作用のなかに展開される構想は、それゆえ多分に状況的にならざるをえない。環境に働きかけ、その結果を直接受けてつぎの働きかけにつなげてゆくという表象無媒介的な連鎖の過程に構想が展開されることになる。このとき環境、すなわち外部として認識される実存を含んだ全体像こそが、個々の心的イメージの淵源としてそれらを時空的に支えるダイナミックスキーマであり、そのスキーマを導く精神活動が直接構想のひとつの様態ということになる。

このモードの構想の方向が最も端的に展開されるのが主として芸術の領域であることは、手と目、あるいは手と耳の活動が分かちがたく常に連動してゆく世界であることから必然的ともいえる。しかし、話が政策や社会構想のような場にあっても、生態学的な視座に立っておこな

うとなれば、直接構想が意図的に選択されてゆかざるをえないだろう。

直接構想がもつもうひとつの照準は、C.Lévi-Strauss（1962）が『野生の思考』において語ったようなブリコラージュ（bricolage）にあてられる。構想はどのようなモードにせよ、組合せ、総合のうえに成り立つ。それはG.Vico（1710）が分析に対する総合、とりわけ「互いに離れたところにある相異なることどもをひとつに結合する能力」、インゲニウム（ingenium）として判断や推理に先立つ人間の知性の第一作用であるところのトピカ（topica）、発見の術の基盤となる力として認めていたものである。

間接構想にあってはそれが理性統御のもとで表象に対して悟性直動的、論理的、合理的になされがちになる。それはVicoの見解にしたがえば、知性の第二作用であるクリティカ（critica）、すなわちものごとに対する真偽判断をくだす仕事に相性をよくするといえるだろう。表象を個々のかたちに形象化し、多くの場合、そのことばをよりどころに、よく考えてみることをだいじにするからである。それに対して、ブリコラージュではありあわせの材料をもとにして、それに対し改めて感性的なボトムアップの過程をつうじて、現実のかたちそのものに働きかけながら一見間にあわせであるかのような活動のなかに、あたらしいかたちを再編成的にもとめていく。これはまさにあらたな発見へとつうじるトピカの作用といえるだろう。

最後に、Vicoがナポリ大学でおこなった講演（Vico,1709）のしめくくりに古代ローマ喜劇から引用した言葉を添えておこう。というのは、彼のいう構想力、インゲニウムは彼の生きたバロックの時代精神を反映して機械的技芸を促進する動的な組合せを暗示しており、いまにして思えばその背景にある思想に反し、近代テクノロジーの膨満的発展をもたらした間接構想を養う精神的土壌について語っていたようにもみえるからである。しかし、彼がこの力の射程にとらえていたところはつづく引用から読みとれるように直接構想にあったはずである。いわく「人間の知識自体が諸事物が美しい比例のなかで合致しあうようにする……これを実現しうるのはただひとり構想力、インゲニウムに富む者たちだけなのである（1710）」と。そして、「他の事でもみなそうだが、そういったことにはこれといって
……夢中になったりせず、みなほどほどに」

本稿では想像のスペクトラムに交わる動きとしての構想の姿をおさえ、それを大きくふたつの様態においてとらえた。今回はその射程の把捉に焦点をあてたが、とりわけ直接構想に対する踏みこんだ考察は今後の研究課題であり、稿を別にして詳しく論じるつもりである。

注

* ちなみにその彼が幻想絵画として高い評価を与えているのは、たとえば、H. ボッシュの『カナの婚姻』、J. ベランジュの『主の墓のかたわらの三人のマリア』、E.V. リュミネーの『ジュミエージュの苦刑者たち』といった具合である。

引用文献

Adler ,M.J. & Doren,C.V. 1972 How to Read a Book. Simon and Schuster. 外山滋比古・槇

未知子訳 1997『本を読む本』講談社 .
Bachelard,G. L'Air et les Songes.: Essai sur l'imagination du mouvement. 1943. 宇佐見英治
訳 1968 『空と夢』 法政大学出版局 .
Bergson,H. 1919 L'Énergie Spirituelle. Presses Universitaires de France. 渡辺秀訳 1992
『精神のエネルギー』白水社 .
Caillois,R. 1965 Au Coeur du Fantastique. Éditions Gallimard. 三好郁朗訳 1975『幻想のさ
なかに：幻想絵画試論』 法政大学出版局 .
半田智久 2001「脳と認知科学」日本統合医療学会誌 1（1）22-26.
Jacob,F. 1982 The Possible and The Actual. Pantheon Books,N.Y. 田村俊秀・安田純一訳
1994『可能世界と現実世界：進化論をめぐって』みすず書房 .
Jung,C.G. 1935 ¨Uber Grundlagen der analytischen Psychologie. The Tavistock Lectures.
In Analytical Psychology: Its Theory and Practice. Walter Verlag AG. Schweiz,1968:
Routledge & Kegan Paul,1968. 小川捷之訳 1976『分析心理学』みすず書房 .
Jung,C.G. 1944 Psychologie und Alchemie. Rascher Verlag. 池田紘一・鎌田道生訳 1976『心
理学と錬金術 I・II』人文書院 .
Kant,I. 1781 Kritik der reinen Vernunft. 篠田英雄訳 1961 『純粋理性批判』岩波書店 .
Kant,I. 1798 Anthropologie in pragmatischer Hinsicht. 山下太郎・坂部恵訳 1966『カント
全集・第 14 巻・人間学』理想社 .
金原省吾 1933『構想の研究』古今書院 .
Kotre,J. 1995 White Gloves. The Free Press. 石山鈴子訳 1997『記憶は嘘をつく』講談社
Lévi-Strauss,C. 1962 La Pensée Sauvage. Librairie Plon. 大橋保夫訳 1976『野生の思考』
みすず書房
Merleau-Ponty,M. 1961 L'Oeil et l'Esprit. 滝浦静雄・木田元訳 1966 『眼と精神』みすず書
房に所収 .
三木清 1939「構想力の論理 第一」、『構想力の論理： 三木清著作集第 8 巻』岩波書店、
1948 に所収 .
三木清 1948『構想力の論理： 三木清著作集第 8 巻』岩波書店 .
三木清 1954 『人生論ノート』 新潮社 .

Montaigne,M.E. 1588 Essais. 関根秀雄訳 1995『随想録』白水社 .

Morrison,P., Morrison,P. & The Office of Charles and Ray Eames 1982 Powers of Ten:

About the Relative Size of Things in the Universe. 村上陽一郎・村上公子訳 1983

『POWERS OF TEN』日本経済新聞社 .

Pascal,B.1670 Pensées. 由木康 1990『パンセ』白水社 .

Platon Phaidros. 藤沢令夫訳 1974『プラトン全集 5: パイドロス』岩波書店 .

Stone,A.R. 1995 The War of Desire and Technology at the Close of the Mechanical Age,

MIT Press. 半田智久・加藤久枝訳 1999『電子メディア時代の多重人格：欲望とテクノロジーの戦い』新曜社 .

Taton,R. 1955 Causalite et Accidents de la Decouverte Scientifique. Masson et Cie. 渡辺正

雄・伊藤幸子訳 1968『発見はいかに行われるか』南窓社 .

Todorov,T. 1970 Introduction a la Litterature Fantastique. Editions de Seuil. 三好郁朗訳

1999『幻想文学論序説』東京創元社 .

Vico,G. 1709 De Nostri Temporis Studiorum Ratione. 上村忠男・佐々木力訳 1987『学問

の方法』岩波書店 .

Vico,G. 1710 De Antiquissima Italorum Sapientia ex Linguae Latinae Originibus Eruenda,

Liberprimus Sive Metaphysicus. 上村忠男訳 1988『イタリア人の太古の知恵』法政大学出版局 .

2001 年 12 月 27 日 受稿
2002 年 6 月 5 日 受理